

文部省特別選定

優秀映画鑑賞会推薦

伝統工芸の名匠

# 藤本能道の色絵磁器

ゆうびょう か さい

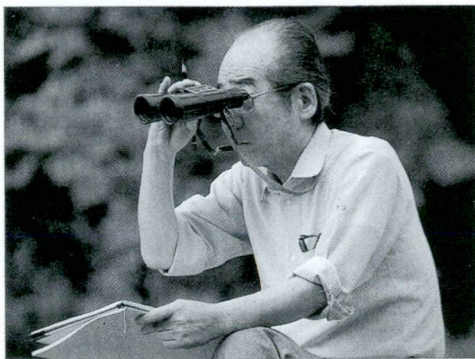
釉描加彩



# 「藤本能道と色絵磁器」

——林屋 晴三——  
(東京国立博物館)

我が国で、色絵磁器が生産されるようになったのは、江戸時代、17世紀の中葉、有田において、初代柿右衛門が始めたと伝えられ、それまでの陶芸技術の多くがそうであったように、上絵付の技法も中国人から習得したものであった。その後、有田を中心に、各地で生産されるようになり、古伊万里、古九谷と称される色絵磁器が、今なお声価が高い。



自然をスケッチする藤本先生

近、現代の色絵磁器は、当然そうした流れをうけているが、しかし、地域的な生産の他には、個人的な作陶家によって、個性的な芸術的表現を、求めて行なわれるようになり、そうしたなかにあつて、富本憲吉、加藤土師萌の二人は、日本だけではなく、中国を中心とする東洋の色絵の伝統を、技術的に探究しつつ、それぞれに一風ある色絵を展開した。

藤本能道氏は、富本、加藤両氏に師事して、色絵の世界に入り、写生に立脚した絵画的な色絵の表現を研鑽、独自の芸風を模索しつつ今に至っている。特に近年、過去の色絵にはなかった釉下彩を加えた色絵の技法を、新しく創案し、その絵画的表現の上に厚味を加えたことは、注目されている。

しかも、作者は、なお究極的な何かを求めての過程として今を捉え、芸大学長という重職を果たしつつ、現代の色絵磁器のありかたを真摯に追っている姿は立派である。

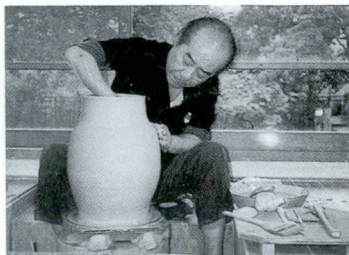
(昭和62年)



微妙な色の効果が生まれる……



独自の技法による上絵付



工房で製作中の藤本先生



## ■解説

重要無形文化財保持者(人間国宝)藤本能道は、現代の色絵磁器の第一人者である。彼の色絵磁器への道は、自ら“試行錯誤の不連続線”と語るように模索と探求の道だった。この映画は、現代の美術工芸への理解を深める上でも、また、一人の人間の生きかたを考える上でも、多くの示唆を与えるであろう。

色絵磁器作家藤本能道が奥多摩の青梅に工房をもったのは、昭和48年、54歳のとき。工房の前を流れる多摩川は、写生の格好の場で、この恵まれた自然の中から、四季折々の野鳥や花を主題にさまざまな作品を作ってきた。

自然のものを自分の目で見て、そこから模様をつくることを説いたのは、彼の師の富本憲吉である。師の「模様から模様をつくらず」という言葉は、彼の色絵の出発点だった。藤本は師の教えを守りながら、その一方で師の影響から抜け出そうと、独自の色絵磁器の道を模索した。戦後の長い遍歴の末、再び色絵磁器の製作に戻った彼は、まず、今までの伝統的な色絵の技法(輪郭を線描きして、そこに色絵具を伏せる、いわゆる塗り絵式の方法)に、新しさを加えてみようと考え、幾度もテストを繰り返すうち、輪郭を線描きせずにはかして描く「没骨描法」という、中国絵画の技法を上絵にとり入れた。さらに、混ぜ合わせてはいけないとされていた五彩の絵具から中間色をつくることに成功し、リアルで、極めて写実的な表現を可能にした。

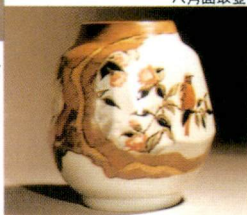
藤本が「釉描加彩」と名づけた、新しい色絵の技法が生まれたのは、65歳を過ぎてからであった。この「釉描加彩」によって、複雑微妙な色調、立体感、奥行き表現など新しい色絵磁器の世界を可能にさせたのだった。藤本能道——色絵磁器への模索と探求はまだ終わっていない。

### ●釉描加彩とは…………

藤本能道が伝統技法を超えるべく生みだした、新しい色絵の技法。まず第一段階で、色のある釉薬で絵付けをし、高温で本焼きをする。次に第二段階の上絵付けで、色絵具で再度絵を描き、低温で焼きつける、という技法で藤本能道の色絵技術が集大成されたもの。この釉描加彩の技法により、中国明時代に完成されたといわれる伝統的な色絵磁器の技法に、画期的な新局面を開いた。



草白釉・釉描金彩雪中射鶴図  
六角筥



草白釉・釉描金彩椿射鶴図  
八角面取筥



草白釉・釉描金彩木の葉づく文  
四角大筥



色絵百舌図花壺

作品名：シリーズ〈伝統工芸の名匠〉  
「藤本能道の色絵磁器」  
——釉描加彩——  
(35mm/カラー/33分)

企画製作：財団法人ポーラ伝統文化振興財団

製作協力：株式会社 桜映画社

監 修：林屋晴三  
長谷部満彦

製作スタッフ：製 作・村山和雄 照 明・水村富雄  
脚本・監督・村山正実 西村幸雄  
撮 影・村山和雄 本橋俊男  
山屋恵司 音 楽・長沢勝俊  
木村光男 録 音・福島音響効果  
編 集・沼崎梅子 解 説・幸田弘子

協力：末岡信彦 広瀬義之  
橋詰正秀  
陳内友幸 徳久芳樹 近藤芳子  
加藤達美 富本壮吉  
東京国立博物館  
東京国立近代美術館 石川県立美術館  
MOA美術館 長谷川美術館  
石川県兼六園

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture

公益財団法人 **ポーラ伝統文化振興財団**

<http://www.polaculture.or.jp>

〒141-0031 東京都品川区西五反田 2-2-10 ポーラ第2五反田ビル

TEL.03-3494-7653 FAX.03-3494-7597